

貞慶・獻尊の戒律興行に就て

成 田 貞 寛

鎌倉時代は文化の諸現象に亘つて、復古の氣漲つた時代である。仏教に於ても亦その新旧を問はずかゝる思想に根柢を置き、末法思想を背景として進展している。されば鎌倉の諸聖にあつては、この末法時機に因していかにかこれを觀るかによつて、その行き方態度も自から異つてゐると云ふことが出来よう。戒律の興行が特に論ぜられるようになったのも、かかる時代的背景に於てである。今南都に於ける戒律興行を標榜せる言はば、この時代の先かけとなつたのは中川の眞範を挙げねばならぬ。がしかし正しくその態勢を要を實動に移つたと云う顕著な地位を占むると言ふことになれば、豈置の貞慶を推さねばならぬと思ふ。貞慶が戒律興行の才一段階とすれば、戒如を経て地盤が算焉は正しくその軌道にふみ入つて、その道に専心した時代と云ふことが出来よう。

二

貞慶の生涯を通じて最も顕著なことは、彼が三十八歳（一一九三年、建久三年八月頃）、豈置に

隱遁せることである。彼の竺置山隱遁が何を意味するか、如何なる理由で何の目的であつたかを尋ねることは彼の生涯を理解する上に於て最も重要なることである。その原因とする所、諸説ありて一定しないが、元亨釈書の伝承から推して考へるならば、彼一族が保元平治の乱より体験した末法濁世の激しい世相の變遷と実践の伴はない淳華居士と名利のみを追求する僧界に満足せず、眞の求道者としての修行を求めらるにあつた事であらうが、他面當時異りつつあつた浄土教に對し、南都仏教の復興を志し、そのためには興福寺の伝統的な束縛から脱して自由な立場に立つて自己の信念を主張し、世人を導くためであつたとも考へられている。兎に角、竺置隱遁は彼にとつて一時期を劃するものであり、爾末法相宗義より生れた弥勒信仰と戒律興行運動の提唱となつて現はれた。興慶が戒律興行えと志したのは何時頃かと言うことは諸伝の伝ふる所、区々としてゐる。律宗瓊鑑章卷六には竺置遁世以後とし、興正菩薩略行狀には建暦元年（一一二一年）律苑僧宝伝等には弄しく建暦二年としてゐるが、戒律再興續書に於ける戒如の與書には、承元之頃、興福寺の律宗を崇めんがために、道場を建立し律の章疏を書写せんとし、所懷を記したものであると本書の由來を記してゐるから、恐らく承元二年彼が五十四歳、竺置より瓶京海住山寺に移りし以後のことと考えられる。永律宗綱要卷下、律宗瓊鑑章卷六、四照上人行狀記卷上等には、建暦二年弟子覺眞の建立にかかる常喜院に二十名の僧をおいて、戒律學を研鑽せしめたことを伝へてゐるから興慶の晩年のことと推測することが出来る。しかし先にも一言せる如くその素志はすでに竺置遁世の当初より彼の心にきざしてゐたことは疑いない。彼の撰述にかかると戒律再興願文、勸學記、五箇條の起請文等には戒律興行への決意とその意義を説いてゐるがその直接の動因を何れに求むべきであらうか。興福寺には古來より鑑真

を祖とする律宗を相伝してあり、前記頼文、円照上人行狀記^③にも身福寺東西金堂衆が律を學んだことを伝えているからかかる伝統に動かされたと言ふことも一應考へに入れねばならぬ。しかしもつと直接的な根柢的な問題として彼にせまつたものは何であらうか。愚迷菴心集には「仏前仏後の中間に生れて、出離解脫の因縁なく、粟散扶桑の国に住して、上求下化の修行をかく、悲しくもまた悲しきは在世に漏るるの悲しみなり、恨みの更に恨みとすべきは、苦海に沈むの恨みなり、いかに泥んや眩劫よりこのかた、今日に至つて慈業深重にしてすでに十方恒沙の仏国にさらはれ、罪障ひとり享くして今また五濁亂擾の辺土にきたる」と説いてゐる如く法滅續發の現契と流軌常及の自己えの反省は仏（釈迦・弥勒）の在世に漏るるの悲痛となり、無仏えの意識が必然仏教の初門としての戒律にその定場を求めることとなつたと考えられる。

三

戒律の消息はその自叙伝なる應身孝正記三巻によつてその委曲を知ることが出来る。弟子性海の撰せる興正菩薩御入戒記^⑤慈光編にかかる興正菩薩行実年譜并^④はこれを補ふものとして重要なるものである。彼が戒律興行えの志願が当時の戒律漸興の機運に動かされつつあつたことは否定出来ない。がしかし更に直接的には彼の仏學えの長き間の研鑽と求道の結果、自己えの深き反省と墮落せる僧界えの疑念であつた。孝正記には

「¹凡奉教印可後。十ヶ年間、或面改口失、或書寫尊法、或披覽本經、或談教相、稽古隨分不

休修行。經日無怠。無深信心。於此教常有殘一疑。殆冀承嫡々行者。多墮魔道。……已經年月。末生決誓。屢々勸察。終自懷不持淨戒不入七衆。非仏子。」

と説いて教界への批判と持戒への決意を記している。更に宗祖（弘法）弘仁の御遺誡、承和の御遺誡の文を引いて戒律興行への意義を述べ当時東大寺戒壇院の授戒具隆を企図せる華严上人に会い、西大寺に移住、戒如並に門下覺証、円晴に就て四分行事鈔の講義を春秋二季に亘つて聽聞し、更に常壽院覺盛に従つて、表無表章に就て披説、自誓受戒に至りし所以を語っている。彼の時代への態度は正に貞慶と同様であつたことを理解することが出来る。しかし両者の生涯を通じて感ぜられることは、前者が法相宗義に立脚した前勤念仏⑤戒律再興にその重負を置き、法相宗義の時代的再認に於て南都仏教の本末の行き方をめざし、時代に対えんとしたのに対し、後者は密教と戒律との一如を説き、弟子忍性と共に文殊涅槃王所説の文殊信仰⑥により極めて積極的な戒律實踐者として西大寺を中心に近畿一円を舞台として、教化活動せることである。御入戒託には、

「柳先師発心臨行七十余回之間。專任闍提之悲願。無願淨刹之往生。不嫌惡趣。不遁此地。只生者度有緣之所。願救同類弄形之生。雖然願大行滿。不顧自生。其理必然不可動疑。何況憶生前之本誓。密施自在之利益。豈敢背素志哉。加之依瑜伽之施設。弘菩薩通教之戒行。學真言之教理。積加持三昧之薰修。」

と語っている。その御生涯に就ての適切な言葉と云うべきである。以上両者の性格の一端を見れば、然し何れも僧室の運立にその生涯を捧げた点に於て何ら異なるところはない。

〔註〕

- ① 塚池香峰著 日本仏教思想の展開所収 貞慶について 一〇五頁以下参照
- ② 續々群書類従第三 四照上人付伝記の項二頁
- ③ 拙稿 印度原仏教學研究 第三号参照されたい。
- ④ 西大勲謚興正菩薩行実譜は元禄年間（一六八八—一七〇三）京都淨住寺慈光が孝正記を骨子として叔尊に關する京資料（諸願文）が集録されている。
- ⑤ 山崎慶輝著 龍谷學報第三五三号所収 南都仏教に於ける弥勒信仰の意義 三〇一頁以下、宮崎四尊者 中世仏教と庶民生活所収 文殊信仰について 参照。尚彼の非人、癡患、救済教化は又一面に於て瑜伽戒に基づけることは明かである。
- ⑥